「那の津往還」をめぐる景観

倉掛　聖子　*Seiko KURAKAKE*　南区長住

一九九九年八月、私は今、博多港に立っている。久しぶりの夏空。潮の香りを含む風。博多埠頭は、ベイサイドプレイスができて急にオシャレになった。若者の夢が満載の土産物店。小粋なパブ・レストラン。巨大水槽は子供にも大人気。初めてみる珍しい魚。亀が水中ではこんなに軽々と泳いでいる…。絵に描いたような平和な風景。

でも忘れないで戒きたい。対岸のマリンメッセの海側に「那の津往還」と題する、豊福知徳氏の引揚記念碑があることを。

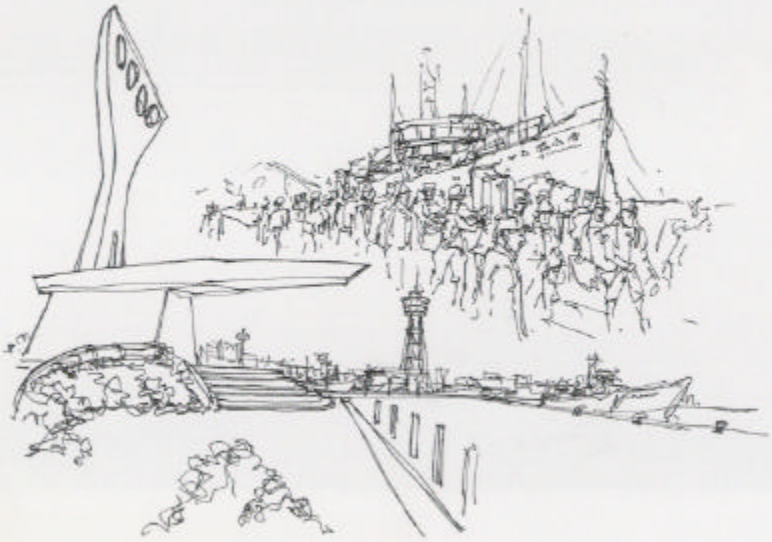
五十四年前、日本は戦争に敗れ、中国大陸や朝鮮半島にいた日本人は、飢えと寒さに地獄のような苦しみを味わいながら、命がけで日本へ引き揚げて来た。その受け入れ港がこの博多港であった。子供を失い、或いは親とはぐれ、たどり着いた港に彼等は何を見ただろう。いまだに肉親探しに来日する孤児たちも年令を重ねた。

また、日本で強制労働させられていた中国や朝鮮半島の人が、晴れて故国に帰れた港でもあった。桜の記念樹の下には「木浦公立高等女学校」「朝鮮群山府在住者」等の碑文が読みとれる。

ベイサイドプレイスで楽しむ心の片隅に、こんなにも大きな代価を支払った後に、やっと今の平和が得られたことを止めておいて欲しい。そして、平和は常に守っていかないと、いつの間にか消えてしまうかも知れないことも。

沈む夕日に、記念碑の朱色の人型が輝いている。海辺に立つ人型は、古代人が大陸との長い行き交いの歴史を静かに瞑想しているようにも、また、二十一世紀を目前にして、大きく変わろうとしている日本の将来を、しっかり見据えているようにも見える。

暗い方向ばかり目につく現代ではあるが、みんなで智恵を出し合い努力すれば、日本は本来すばらしい国なのだと信じたい。



記念碑建立手法は明治維新後の国家的事業を後世に伝える意図で多用され、石造文化の伝統を背景に広く受け入れられた。記念碑をよすがに市民は記憶を語り継いでいく。華やいだまちと苦難の記憶の対比が胸に迫る。

（運営委員　永嶋　明子）